

見果てぬ夢

騒がしい赤湯を後にして、向かったのは上ノ山。軽い傾斜地に横たわる人口3000人を超す温泉場だ。ちょうど、夏祭りのシーズンで、どの家にも提灯や旗が飾ってあった。神社の境内は祭りを楽しむ人々でごったがえしていた。バードが泊まることになったのは大きな旅館で、女主人は子ども二人を持つ未亡人だった。娘たちの中には、背がすらりと高く、きれいでやさしかった。その中のひとりは、バードを連れて、神社や浴場や、旅館を案内してくれた。

未亡人にこの旅館はいつたい何年やっているのかと聞いたら
「300年やっています」
と誇らしげにこたえた。





バードが泊まったのはこの地方独特の蔵屋敷。〆階が蔵になっていて、一階が客間となっている。庭に温泉がひかれていて、〆度のお湯が入っている。バードはこの温泉に心行くばかりにひたった。鉄分と硫化水素が含まれ、リュウマチに効くというこの温泉はバードの背中痛も癒してくれている。お湯を出ると蚊がたくさんいて、バードを刺そうとしたが、未亡人と娘たちがかわるがわるうちわで一時間もあおいでくれた。おかげで妹のヘンリエッタへあてた13峠後半の手紙を書くことができた。

バードのために用意された真新しい蚊帳はとてつもない具合で、バードの血をブンブン狙う蚊どもを寄せ付けない。バードの部屋には仏壇があり、二つの仏像がまつられていた。ひとつは、女神である観音像。そして、不自然に頭の長い神福祿寿、長寿の神だった。このふたつの仏像がバードを奇妙な夢に誘った。

バードは石畳のある峠を牛に乗って進んでいる。木々は見事に紅葉し、赤と黄色の木々がこの世のものとは思えないほど美しい。峠をすぎて村に着くと、巨大な銀杏の木が立っていて、下では女や子供たちが、銀杏の実をひろっている。

村を越えてさらに別の峠をのぼっていくと急に雪が降り出した。峠を降りる頃には、あたりは一面の雪。猛吹雪が吹いてきて、息がでないほどになった。周りには身を隠す木も生えていない。牛から下りたバードは、イトーが雪に掘った穴に、顔をつつこんでようやく息ができた。

「おーい！雪崩だ、気をつけろ！」

誰かが大声で叫ぶと、地響きとともにバードの目の前を雪が流れ落ちていった。すんでの所で助かった。

バードは再び牛に乗っている。春の日差しは明るく、背中痛みは全く感じない。峠を下りて、平坦な道を行くと、ところどころに桜が咲いている。なぜか、亡くなった父が話しかけてきた。

「ルーシー、いつまで旅をするつもりだい？」

「そうね、歩けるうちはずうつとよ。ここまで来たんだから、朝鮮や、中国の山奥にも行って見たいわ」

春の風がヒューっと吹き、桜の花びらが舞った。振り向くと、まだまだ雪化粧を落とさぬ飯豊山が、白く輝いていた。

【完】

